

ガケ(木地くり)の仕事などは、一年もみっちりやれば会得(まうとく)できた。それで木地屋の作業場にはこのための鍛冶場が設けられている。
木地屋の道具は、カンナ一つである。それもいろいろあって、外道具と内道具がある。

外道具 ビビラ・マルガンナ

内道具 シヤカ・ウチシヤカ・エグリ・ダラツケ

これらカンナ一つでもって、木地をつくるのであるが、もう一つロクロを使う時にカンナを持つ腕を支えるウマというのがある。

ところどころ木地とはどんなものがあるだろうか、腕、盆などが主としたものであるが、盆などは直径二尺もあるようなものをつくった。しかし何といつても一番むずかしいのは基石入れであるという。碁を打つ人が盤面をにらみながら基石を指で押えたまま穴の内側に沿って出せるように作らねば、ほんとうの基石入れとはいえないとか、また一対に必ず高低があって、低い方が黒石、高い方が白石入れというふうに関連して作るなどの奥義(おくぎ)があるとかである。

木地屋は木地屋仲間縁組みし、一般民との婚姻はしなかった。特殊の技術を要する職人集団であるところにその理由はあるようだ。

木地屋には年中行事らしいものはない。ただ木地師総本山である君之畑の金龍寺から出している、「木地師元祖・惟喬親王・称号大皇大明神略御縁起」にも記されているように、「正月三日・三月三日・四月九日・五月三日・六月十五日・九月七日・十一月九日」の七度の神事を行うことは欠かせぬ大事だつたらしいが、多くは早くから廃されてしまい、ただ一月八日を「フイゴマツリ」として、これを「御綸旨祭」といい、

かなり盛大に祝っていた。この日はふだん交渉のあった人々を招いて酒食を饗する風習であった。
また木地屋には食習として納豆をつくって保存食とさせることもあるという。

梅が市木地師は君ヶ畑系で、弥三左衛門という者が「文政一三年五月」付で金龍寺からの木地師のものを受領しており、また「弘化二年四月」付の「往来手形」を筒井公文所から受けている。

四 享保の飢饉と久万山

享保一七年(一七三三)の稲作の大被害は前代未聞のもので、伊勢・近江をさかいとして関西全域に及んだ。この夏、畿内・中国・四国・九州方面には数十日にわたる長雨が続いた後が大ひでりとなり、おびただしい蝗(いせ)か発生して稲という稲を食いつくし、そのため米の収穫皆無という地方も多く、いわゆる享保の大飢饉となったのである。

英主として聞えた八代將軍吉宗は主な社寺に命じて祈禱を行わせる一方、百万手をつくして貯え米を出させ、被害の甚だしい地方に輸送して飢える民を救うことにとめたが、何しろ広い範囲であるのと、人数が多いために十分に行き届かず、多くの餓死者を出したのであった。この時、西国の餓民二六六万人、死者は、一万二七二人といわれている。

幕府はこのことがあってから、貯米をすすめるとともに、南国の薩摩が甘藷を栽培していたため餓死者が少なかったのを見て、青木昆陽に命じ、享保一七年(一七三三)に小石川薬園及び吹上の庭に甘藷を試作させた。そして栽培法を記して、種子を各国に配った。

同日 水野信左衛門宅へ諸郡代官招かれ、このたび虫さし大痛みにつき諸郡改め方申し渡され、同十四日まかり出る。郡奉行も出郡郡々へまかり越す。

同十四日 当年島へうんかという虫つき勘定奉行木戸仙右衛門勘定中谷

孫八東、武へ注進のため、まかり越す。云々。

このため、当然食糧不足、物価高となり人民の困窮がひどく、餓死者も出て来たのである。

「御先祖由来記」には、

春よりの長雨、田方植付けはよく候へ共、六月以来うんかという虫つき、一面に田方痛み一粒も収穫これなきに付、家中人数扶持に仰せつけられ飢人数多くして死者辻々町々にこれあり其の数はかり難く、町郡方へは救米、麦少々ずつ人別見分の上くださる。米・麦・大豆・小豆ねだん高値になり、米銀札一匁に一合一匁までに相成り、その外右に準じ諸色値上り銀札通用あしく一匁に一〇枚がえの内外にて諸人難儀これあり、また「味酒社日記」には、享保一七年六月中頃より、うんかという虫わき候て郡々村々昼夜大勢寄合候て追い候え共なかなか止み申さず、それより雑穀切二俵につき値段左の通り

米	一六〇匁	白麦	一二五匁
小麦	一二五匁	荒麦	一〇〇匁
大豆	一〇九匁	其他給物之に準ず	

諸品高値にこれあり、もつとも町方郷中とも二分・三分・五分の穀物は売り申さざる位にて家中二〇日・二日に人数扶持に仰せつけられ候由、もつとも近国大洲並びに宇和島・今治なども右同様の由、又八月朔日頃、値段一匁に付米二合八匁・白麦四合・荒麦五合・大豆四合・小豆四合・もつとも米は右値段にても町方に一切商売いたさず候て難儀いたし候。もつとも町方へ

伊予においては青木昆陽の試作より二年余り前、既に越智大三島(きよ)の下見吉十郎によって移入され作られていたのである。正徳元年(一七一一)吉十郎は六部行者として回国中、薩摩の国で甘藷の種子を得て、天災飢饉の時の応急食物としてよいことを知り、禁をおかしてひそかに持ち帰って試作し、次第に附近の島々におよぼしたという。そのため享保の大飢饉に今治藩が餓死者を出さなかったのは、その余徳によるといわれている。大三島には今に「いも地蔵」として祭られている。

享保の飢饉の被害が最もひどかったのは、実に我が松山藩であった。なかでも松山を中心とする道後平野の災害が甚だしく、今日高井に残る供養塚は当時の惨状を伝えているし、伊予郡筒井村の義農作兵衛が麦種の袋を枕に餓死したという美談も、この時のことである。

この地方では五月二〇日ごろから七月上旬まで雨が降りつづき、中旬になると稲は枯れくさり、そのうえ虫害が加わって、重大事に立ち上がったのである。その模様を当時の記録は次のように記している。

七月朔日、諸郡とも稲虫害これあり候につき道後八幡宮にて御祈禱仰せつけられ、諸郡にておおい存じより祈禱いたし毎夜太鼓かねにて虫送りなす。

同月九日 水すき候につき虫付候ように申触れ、之によって未だ虫付なき稲は干つけ候よう御触れこれあり、

同月二日 早稲・太糖・晩稲大いたみに付、みのり申さずと見え候分は粟・大根・そば等植え付け百姓勝手に致し候よう相触れらる。

同月二三日 追々稲かれ御領分皆無と相見え、これによって町方など騒動いたし、よろしく生立ちおほり候稲も一兩日うちに残らず枯れくさる模様聞こゆ、今日より味酒社に於て御祈禱仰せ出ださる。

は公儀よりその町組々へ家門高にて一人前に八勺ずつ御割渡ししこれある位なり。

七月二八日米値段銭札二八〇目、その後三三〇目に相なり麦穀物之に準じ実に前代未聞の価なり。もとも値段極まると申すことなし。

一月五日社中の者風早より帰宅す。米値段七五〇目その外雑穀物高値、所々餓死人等多くこれあり候由。

また別の記録には、食糧が極度に欠乏したため、村方から食を乞う者が列をなして町へ現れたことを伝えている。

七月一日 郷方の者共、町方へおいおいおびたしく袖乞いにまかり出て、今日などは多人數、袖乞いと申し町家へ押しかけ候に付、町中しとみを打ち奉行手附・郡奉行手附・諸郡月番等召連れ諸郡打まわり、目附・手代・同心など押えにまかり出で、それ故十七日頃より多人數打つれ袖乞の儀相止む、右袖乞は伊予郡の者最も多き由。

八月一日 諸郡難澁者多く米不自由につき左の通り売米仰せつけられる。もとも久米郡は久米村より下方村々へ売拂候よう仰せ出さる。

三〇俵 伊予郡 和氣郡
二〇俵 浮穴郡 久米郡

銀札一匁に五合宛

九月二三日 伊予郡筒井村百姓佐兵衛、餓死・餓死者については、享保一七年十一月十九日右の通り、藩主より幕府へ届け出ている。

私在所予州松山先達てお届申上候通り当作毛虫つき皆無に付、飢人目を追いおびたしく御座候、随分相救い候様に申し付け候え共大勢の事に御座候故、手当相届き兼ね段々餓死人これあり候、並びに牛馬等も斃れ候につき御届申上候
十月まで

餓死人	男	二、二一三人
	女	一、二七六人
牛馬斃死	馬	三、四八九人
	牛	一、四〇三匹
		一、六九四匹
	メ	三、〇九七匹

右の通り御座候 以上

松平隠岐守

一二月七日に御用米改めとして上使井戸平左衛門が松山に來ている。その結果、一二月十九日付で藩主久松定英は、領分餓死人の數多く裁許行届かずとして老中松平右近將監乘邑より、差控えを命ぜられた。

松山藩の救助にはすこぶる手ぬかりがあり、その上藩士に一人の餓死者もなかつたというのは、農民に対して取扱いが酷であるという結論が、たものと思われる。

藩主が差控えを命ぜられたことについて、「却睡草」に次のような見解が記されている

享保一七年秋、西国大飢饉いねに虫つき一向にみならず、松山死者四七八〇余人とぞ記したり。御上お叱り仰せ蒙られ、御差控え、寺社勤業の鐘鼓も音たえ、町人は節を打ち誠にもの哀れを止めしよし家祖母の話されし。かかる死人の多きに士中一人餓死の事も聞かず、如何なる故ぞや、君の御恩沢にあらざるべきや、先祖の功名働きあればこそ知行頂戴いたし、子孫はさまざままで苦勞もせずしてむまぐくらく、あたかきたる者多し。

かかる御恩沢をば、むげにおもはば天罰を蒙るべし、我こそ士なりとて治世の富貴にそだち、さむらい顔して日を暮らすは素餐（註）、その職をつとめずして徒らに官禄を食むこと（註）の罪おそるべし。

物語っている。

畑作皆無となつた時の食糧として一般に、山野に自生する「かずね」又は「すみら」というものを掘つたことが古書に見える。その説明を聞く、

村々在々は、かずねと言ひて葛の根を山に入りて掘り食ひしが、これも少なくなれば、すみらというものを掘りてその根を食せり。

この類はその根をくだし水にさらし、それを団子に作り塩煮して食す。すみらというものは水仙に似たる草なり。その根を多く取り集め鍋に入れ、三日三夜程水をかえ煮て食す。久しく煮ざれば、えぐみありて食し難く、三日程煮れば至極やわからになり、少し甘味もあるようなれど、その中にえぐみ残れり。

余も食しみるに初め一つはよく、二つめは口中一ぱいになりてのどに下り難く、三つとは食し難きものなり。されど食尽きぬればみな、ようよう之を食して命をつなぐ。哀れなること筆に書きつくすべきにあらず。

（橋南蹊著 西遊記読編）

この文中、かずねというのは極めて掘り難いもので山分では上等の食物とされている。

この根の澱粉をとつたものが「くず粉」である。わらびの地下茎から取つた澱粉は「わらび粉」といい、また「うばゆり」の球根からは、「かたくり粉」をとる。いずれも良質のものであって、平素は病人食にもするのである。

すみらというのは、彼岸花の球根で一名を「ほぜ」という。

古老の話によると、明治一九年の上浮穴郡の風水害の時は、各村争つてほぜを掘り、少なくなつたという。

我等この飢饉の話聞き、知らぬ昔にあわれを催うせり。衆民何の罪ありて四〇〇余人死傷に及ぶや、その節の士中如何の功名勳勞ありて、むまぐくろうて生き延しや、おもえばおもえはもたないく恐れ多き事ならずや。時の執政の速き慮りなき故に殿様迄へ汚名をかけ奉ること、ひとえに役人の罪なり。

何故平生あまた米穀を貯えおさざるや、たとい今日にも万一左様の変生せば万民のなげき如何ぞや。ここに飢饉に対処するために、貯米の必要が説かれていることが注目される。そして役人らが今更のように現地を見廻つて前後策につくした様子が、享保一八年に入つてからの記録によく表われている。

正月三日から家老久松庄右衛門、奉行稲川八右衛門はじめ諸役人が道前道後の諸郡を巡廻して被害調査をする一方、痛みに応じて救米や衣類を支給している。浮穴郡へは中老遠山権左衛門が出向き、各村々に滞留して日々検分したという。

また年貢御免の処置をとつたり、塩・味噌・薪・あらめ等を給し、二月に入つては種籾（よ）を給し、更に米・麦・大豆等の値段引下げの処置を講じており、江戸で差控え中の藩主は四月十九日に赦免となつた。

この享保の飢饉が我が郷土久万山にどのような被害を与え、住民がいかに難渋したかは全く不明であるが、前に述べたような地理的、歴史的条件の下で糊口をしのいでいたのであるから、天災が起これば、平坦部以上の深刻な食糧不足に見舞われ、餓死者も多かつたことと想像される。宝永から享保の初めにかけて、人口二万人を数えたものが、この飢饉以來減少して一万七〇〇〇人になつたという乏しい資料が、このことを

ほげは又昭和一六年に起こった大東亜戦争でも、小学生をはじめ一般の人々も、これを掘って供出したものである。

享保の大飢饉といえども、山分である久万山地方には平垣部に比べて、木の実、草の根など食用になるものは多かつたにちがいない。木の実としては山栗・とちの実・くるみの実・柿など、草の根としては、くず根、ほげ(まんじゅしゃげ)・山芋などがあげられる。

又動物も平垣部よりは多いのではなかったかと思われる。

古老の話として聞くと、便所のつりこもまで、きざんでいって食べたそうなどということであるから、想像もつかないような惨めさであったことが想像される。

このように享保一七年の松山藩の蝗の害は大きく、死者三四八〇余人、牛馬の死三〇〇〇余頭といわれ、藩主定英は仕置よろしからずとして幕府から謹慎を命ぜられ、翌一八年五月に逝去し、一子定喬が後をついだ。当時の執政主班は奥平藤左衛門で、下に水野信左衛門、久松庄右衛門がいた。

享保一八年九月五日、定喬の松山藩は奥平藤左衛門を蝗の害による飢饉の処置不調法の至りという罪名で、役義を召放ち久万山に蟄居を命じ、家老久松庄右衛門以下六名を役義召放ち閉門、一二月に入ってそのうち四名遠島、山内与右衛門については、前藩主定英と弟定章との不和の原因を作ったとの名目で切腹を命じ、国老水野信左衛門の家老職をも免じたのであった。

久万山へ蟄居を命ぜられた奥平藤左衛門はどこにいたのであろうか、山之内家文書で見っていくと、次のように記してある。

奥平弾正様山分江蟄居仰付られ、享保一八年九月六日朝西明神村梅木源兵衛方江御出、入野村孫右衛門宅を公儀より御買い上げ、同一二月、孫右衛門宅江御移りなられ候。御人数左之通り

奥平弾正様 御四男御年八つ 同馬之助様

御妹子御年七つ おてる様

御局 おさよどの

下女 あし

御家臣 松本米助殿

近習 大村新助殿

同 西村平蔵殿

歩行 新田源左衛門殿

ぞうり取 友平

御中間 角助

右人数の内源左衛門・角助・新助・源兵衛宅より松山江御戻しに相成候とあり、後許されて松山に帰住したのである。

この飢饉の経験から松山藩としては、救済の失敗にこりて、災害に対する根本的な対策を立てる必要があったようである。

飢饉後四〇年ばかり後の安永四年(一七七五)の非常御困窮の制度というのがそれで、今日の久万凶荒予備組合の起源となっているのである。

五 久万山騒動(寛保元年)

久万山は、隔絶された交通不便な土地柄だけに、これを利用した役人によって、特に苛酷な扱いを受けたたり、また善政の時もあつたり色々なことが起こって農民生活に明暗の姿が繰り返されたことであらう。

敬待した。各兵隊には家族と一緒に高浜までの見送りに来ていたので相当多くの数が宿泊した。民家では一人でも多く泊める事が誇りであったし、また心からのもてなしをした。こうして銃後も一丸となり戦争に協力し、戦場では勇敢に戦い勝ち進んだが、その陰には尊い犠牲者もまたのである。英霊は住民、学童等に迎えられて帰り、おごそかな葬儀が営まれた。それぞれの葬儀には郡長を始め町村長、松山連隊からの弔辞等がおくられた。二〇数名の英霊には町村をあげて弔意を捧げたのである。

五 大正期

1 明治天皇崩御

明治天皇は明治四五年七月三〇日病篤く国民の祈りもかいたく崩御された。時に御年六一歳、慶応三年（一八六七）正月九日踐祚されてから四六年七か月、日本の激動期において日本の発展のために終始されたのである。

国民はひとしくその皇恩を感じて一年間喪に服して歌舞音曲をさけた。

九月一三日は御大葬の儀が国民の悲愁の中に取り行われた。

七月三〇日皇太子嘉仁親王直ちに踐祚されて元号を大正と定められた。

2 桜島の大爆発

大正三年一月一二日には桜島が大爆発を起こし、火山灰は遠く久万上空へも来て終日曇天であったという。この爆発で桜島も島でなく半島になり、人畜の被害も大きかった。

3 第一次世界大戦

また大正三年六月二八日、オーストリア皇太子はサラエボで暗殺され、

七月二八日には、オーストリアはセルビアに宣戦を布告し、第一次世界大戦がはじまった。両国の背景にある二大陣営の国々は相次いで参戦し、ついにヨーロッパは戦乱の巷となった。

日本は日英同盟のよしみにより、大正三年八月二三日ドイツに宣戦を布告し、陸軍はドイツの根拠地の膠州湾を攻撃するため山東省竜口に上陸、すんで山東省一帯の地を占領し海軍は南洋におけるドイツ領の諸島を占領するため、第一艦隊はヤルト島に上陸、一〇月にはドイツ領南洋諸島を占領した。更に連合国の要請によって地中海方面まで出動して連合国側の船を守った。この戦に久万町からも一名の犠牲者を出した。

4 政党政治

大正に入って国民の政治についての考えはしだいに進み、ようやく真の立憲政治を打ち立てようとする機運が起こり、大正七年には政友会総裁の原敬が我が国最初の本格的な政党内閣を成立させた。

一〇年に原敬が暗殺された後、また政党内閣を基盤をおかない内閣がつづいた。

一三年には憲政会総裁の加藤高明が護憲三派内閣を組織してからは、衆議院に多くの議席を占める政党が内閣をつくる慣例が開かれ、政友会と憲政会の二大政党が交互に内閣をつくり、こうした政党内閣は昭和七年政友会の犬養毅内閣がたおれるまで続いたのである。

県政においても政党色が強くでて、明治四〇年から大正元年には本郡からは高橋精一郎が憲政本党から、政友会では大西平三郎が出ている。

明治四四年九月に県議総改選となり、県内各地で、政友、憲本のはげしい選挙戦が行われ本郡からは都築九平が中立で当選している。

四 災害史

1 久万町の災害について

久万町は古い歴史を持つているが、災害については古い時代の記録が少なく、江戸時代以降の記録だけしか得られない。したがって、これらの記録以外にも多くの災害があったとも考えられるが、記録のないものについては現在知るすべもないので、記録を忠実に整理することにした。資料は「久万町文化史年表」および「小田町郷土史年表」と「久万山手鏡」である。

災害は、気象現象に起因する風水害、雪害、冷害、干害などが中心になるが、その他で火災、伝染病なども災害として見のがすことはできない。

これらの災害による被害額なども知りたいと思つたが、それを調べる資料は得られなかった。

これらの記録を検討すると、昔の人々が度々の火災の類焼を防ぐため瓦葺にしたたり、松山藩が伝染病がはやると、薬法を民衆に示したりしていることがわかる。洪水、大雨、大雪、台風などの気象現象に苦しみながら、自然と戦つて多くの業績を残していった様子がうかがえる。

現在のわれわれの周囲の家、河川、道路などにはそうした昔の人々の苦勞がにじみ出ているようで、人間の力強い歩みをそこに感じずにはいられない。

私たちは先人の歩みの中に、今後の私たちの進むべき最良の道を見出し得るとすれば、幸いであると思う。

2 災害史

一一五二(仁平二年)	菅生山大宝寺大火、全山焼失。(大宝寺縁起)
一六二〇(元和六年)	七月三日と八月四日大雨あり、河川流れを變える。(久万山手鏡)
一六六〇(万治三年)	六月久万町村出火類焼一三六戸。(本藩譜、これより三年後寛文三年にも同記事あり)
一六六九(寛文九年)	六月晦、洪水あり、家屋、田畑流失し死人数数出る。その年の八月一七日台風襲来、その暮一二月に大雪あり。人家多数損失。(久万山手鏡)
一六七五(延宝三年)	八月四日大水あり。(同右)
一六七九(延宝七年)	七月一八日大水あり。(同右)
一六八〇(延宝八年)	八月一四日大水あり。(同右)
一六八一(延宝九年)	八月五日大水、暮れ大雪あり。
一六八二(延宝一〇年)	七月上旬大暴風雨あり、被害受ける。(久万山手鏡)
一六八四(貞享元年)	一月九日大風と大雨あり。
一六八五(貞享二年)	五月二日、七月三十一日洪水あり。(久万山手鏡)
一六八六(貞享三年)	一月五日より七日まで大雪、二月三日大水、五月九日洪水あり。久万山の田畑冠水する。七月二五日風吹く。(同右)
一六八七(貞享四年)	九月八日夜二時より朝六時の一日半大風あり。同年は六月三日より八月上旬まで、雨なく旱魃。(同右)
一六八九(元禄二年)	七月一六日大風あり。
一六九一(元禄四年)	八月二日大風あり。久万山米とれず生活困窮する。また、木の被害も多く生活の道なくなる者多し。(久万山手鏡)
一六九三(元禄六年)	旱魃による被害多し。(同右)
一六九五(元禄八年)	正月元旦より七日まで大雪
一六九六(元禄九年)	一月二八日より二月三日まで大雪あり。その上降り続いて、三尺(約一呎)より七尺(二呎余)までの雪が二月二〇日までであり、なおやまず。(久万山手鏡)

一七二一（正徳一年）	久万町村大火一九〇戸焼失。（某家記）
一七二四（正徳四年）	二月久万町村出火。御茶屋ならびに民家残らず焼失。家屋一九六戸。（増田家記）
一七三二（享保七年）	七月久万町村出火。民家一四七戸焼失。（津田家記）大雨、うんかの発生によって大飢饉、餓死者多数。（増田家記）
一八〇八（文化五年）	三月久万町村出火。家屋一〇二戸他に庵一ヶ寺焼失。（三田村秘事録）
一八一七（文化二年）	一〇月六日久万町村大火、一〇〇軒余も焼失。（竹内文書）
一八二〇（文政三年）	三月久万町村出火。一五〇戸類焼。その他高札場久万町村野尻村両村の諸帳面旧記録残らず焼失。（増田家記）
一八二二（文政四年）	三月一日より降り始め、五〇年来の大雪麦不作で種麦も乏しかった。その他畑作皆不作。（竹内文書）
一八二五（文政八年）	久万町村残らず焼失、度々の火災で類焼するため、願い出て瓦葺となる。（増田家記）
一八三九（天保七年）	大凶作、米価騰貴。
一八五四（嘉永元年）	一月四、五、七日大地震。（竹内文書、池内家記）
一八五七（安政四年）	八月二八日大地震。（竹内文書、池内文書）
一八七七（明治二年）	天然痘、コレラ流行。
一九〇二（明治三十五年）	一月久万町役場火災、全焼、他民家一戸。
一九一二（大正元年）	四月久万住安町火災、警察署その他三戸全焼。罹災者七六人。
一九二三（大正三年）	関東大震災、久万小学校火災四教室一棟焼失。
一九四五（昭和三年）	九月県下一円風水害。久万町各地で田畑冠水。家屋浸水、堤防流失する。
一九五三（昭和六年）	一〇月火災曙町七戸。
一九五五（昭和三年）	一月火災久万本町四戸。
一九五五（昭和三年）	九月三〇日台風二号来襲、被害多し。
一九六三（昭和三八年）	一月一七日寒波来襲積雪多し。
	一月大晦より降りはじめた雪は次々と寒波来襲で降

一九六五（昭和四〇年）

一九六七（昭和四二年）

一九八八（昭和六三年）

雪つづき、一月二五日には二尺をこす大雪となり、麦作・森林におよぼす被害大。

ささの花がさき、くまささは、ほとんど枯れた。またねずみ大繁殖して、えさを求めて、杉、松の若芽を食い荒らした。

ねずみの森林被害全町におよび、一月月ヘリコプターによる殺そ剤の散布を行った。

一月二五日から二七日の積雪（二〇、六〇cm）により、立木に大きな被害を受ける。被害額 約一〇億円



昭和63年11月の雪害風景